Chapter 20 : **最悪の部屋でゲームオーバー**

現実――いや、現実“っぽい”場所で。

ゼラオラは、ひび割れたトイレの上に中腰で座りながら、  
暗いバスルームで怒りのタイプを続けていた。

「クソ運営がよ……スキン無し？ 剣持った犬にBANされんの？ ふざけんな……！  
　見せてやるよ、“本当の力”ってやつをなァ！！」

怒りに任せて、スマホを壁に全力でぶん投げた。

──ドカンッ！！！

不幸なことに、ゼラオラのスマホには12個の怪しいプラグインと、  
マルウェアまみれの非公式改造版がインストールされていた。

スマホは小型爆弾と化し、トイレごと爆発。  
床も崩れ、ゼラオラ自身も木っ端微塵。

血、焦げた毛、トイレの水、そしてクソが部屋中に飛び散った。

ゼラオラの身体は見る影もなく、臓器はスパゲッティのようにぶら下がり、  
片方の前脚だけが、バラバラになった端末をかろうじて握っていた。

その上空から――

今月**八度目**のため息をつくホウオウの姿があった。

ホウオウ：「……またか。まったく、懲りんやつじゃのう……」

まるで疲れ切った不死鳥の清掃員のように、  
ホウオウはフワリと舞い降り、辺り一面に浄化の炎をまき散らして  
“呪われた死のトイレ”を消毒していく。

そして、しぶしぶ金色の光を放ち、ゼラオラを蘇生。

ゼラオラは灰と謎の茶色い汚れにまみれながら息を吹き返す。

ゼラオラ：「……俺、生きてんのか？」

ホウオウ：「今回ばかりは、死んどいた方がマシじゃったかもしれんのう……」

その光景を窓の外から眺めていたヤミラミは、  
下水をストローでチューチューすすりながら、腹を抱えて大爆笑。

ヤミラミ：「ブッハハハハ！！！　トイレ・クリティカル！！  
ざまぁみろ、金毛のオナラ野郎ぉ！！」

ゼラオラは、かろうじて前脚を上げながら呟いた。

ゼラオラ：「……インディーゲーなんて、クソだ……」

ホウオウはブツブツと文句を言いながら、空へ戻っていく。

ホウオウ：「次からは……もうアルセウスにやらせるわい……わしの仕事ちゃう……」